富山県俳句連盟会報

第 87 号
平成三十年十二月一日発行
富山市安住町二―一四
〒930-0094 電話 〇七六-四五五-二四三
振替番号 金沢 五―一七一〇八
北日本新聞社編集局内
富山県俳句連盟

第六十七回 富山県芸術祭主催
第二十二回 富山県民芸術文化祭参加
秋季俳句大会
中島淑恵先生の講演を聴く

富山県芸術祭主催並びに富山県民芸術文化祭参加の秋季俳句大会は好天の、十月六日（土）午後一時から、北日本新聞ホールにて、百五十名の参加を得、坂田直彦幹事の司会により開催。中坪達哉会長は身内の葬儀にて欠席。代わって急遽、但田長穂副会長が「十一月四日のねんりんピック俳句交流大会には誘い合わせの上、大勢で参加してほしい」と挨拶。

挨拶の但田長穂副会長

続いて、富山大学教授、中島淑恵先生を講師に迎え「海を越えるキリギリスーギリシアから日本へ―」という演題で、レジメや映像をもとに、講演を聞く。（講演要旨は別掲）

小憩後、俳句大会に入る。すでに出句されている六七〇句（三三五名）について、連盟役員によって選考された特選句、入賞句を中島廣志、西野睦子両幹事より発表。

そのあと片桐久惠幹事、布本美知子理事、大谷こうき理事、森純子理事、森野稔理事から講評を受ける。

引き続き表彰式に移り、黒田哲也北日本新聞社文化部長より北日本新聞社賞、但田長穂副会長より連盟賞をそれぞれに贈呈された。（成績は別掲）

石工冬青副会長が閉会の辞を述べ大会は盛会裡に終了。

尚、当日、連盟合同句集（第四十三集）を発刊し、配布した。

又、北日本新聞社主催の「越中賛歌」作品（投句数三一九句）の入賞百句は北日本新聞十月十七日付け朝刊に掲載され、発表となった。

ねんりんぴっく富山2018 俳句交流大会

十一月四日（日）、黒部市宇奈月国際会館（セレネ）にて開催。募集句選者、稲畑汀子、大久保白村、大輪靖宏、中村和弘、寺井谷子、高野ムツオ、茨木和生、藤本美和子、蟇目良雨、中坪達哉各氏。ジュニア句選者、川上弥生、坂田直彦、野中多佳子、荒木かづを各氏。当日句選者、坊城俊樹、駒形隼男、鈴木しどみ、高野ムツオ、伊藤政美、清水逍径、西山睦、佐怒賀直美各氏。県内より石工冬青、但田長穂、白井重之、森野稔、片桐久惠、田上眞知子、八尾とおる、浅野義信各氏。講師、現代俳句協会特別顧問、「岳」主宰、宮坂静生氏。演題「なぜ芭蕉か・その先見性―『おくの細道』の読み方」

募集句、高齢者、一般の部　三、二九四句　ジュニアの部　六、七八六句

選者特選賞

扇状地一扇として青田風　藤田　百生
立山も地球の突起夏兆す　川口　順子
鍵かけぬ家をうしろに花菜畑　森野　稔

正　賞

戦争に勝利など無し昭和の日　八尾とおる
「おはやう」と校長と子と夏木立　志摩　一美
大空になにもなけれどあたたかし　若土　白羊
みどりごの熟睡八十八夜かな　石田阿畏子
皇后のちひさな帽子すみれ咲く　小竹　嘉子
恐竜の玉子のような黒部西瓜　大塚　喜子
農夫みな声が大きく麦の秋　狩谷　笑子
明日あたり街へ出でんと田芹摘む　中坪　達哉

准　賞

七十の娘頼りに雪囲　四十物敦子
平成がをはる蛍を見てをりぬ　小林　朝子
万緑の机に安全帽ひとつ　五箇　洋子

当日参加者、県内外より三七三名。

選者特選賞

胡桃落つ眠りはじめるダムの底
寺田　恭子（選者一名より）

紅葉晴ごつんと止まる山のバス　二俣れい子
峡深し早瀬が醸す秋の声　北川　越草
出力の日本一のなかまど　五箇　洋子
山幾重紅葉幾重のダムの湖　浜田　律子

遠山に雪の来ている足湯かな　森　純子
足湯てふ峡の止り木神の旅　坪川　正
一日を紅葉の中にホ句の旅　田中　憲子
湯の町のねんりんピック秋高し　西野　睦子
湖底より深秋の声遠からず　道用　紀子

正　賞

湯の谿に異国の秋を拾ひけり　山本　正子
放屁虫と日向分け合ふ山の宿　成重佐伊子（准賞にも）
紅葉谷人声のよくひびきけり　森川　敬三
越冬の物資積まるる始発駅　大久保置箔
傘松の幹の流線秋日降る　三雲繪里子
秋深し開湯仏の百年の眼　荒井　君代
眺め込む百の眼百の紅葉山　尾山勢都子
トンネルや入るも出づるも紅葉山　山下　正江
遠く来て一期一会の峡紅葉　大塚　紀夫（准賞にも）

准　賞

行く秋の足湯にまぎる国つ神　久田美智子
恐竜のでてきさうなる秋の湖　島田おたか
湖に向き翼をたたむ鷹一羽　石黒　順子
大ぶりの黒部の木の実降りにけり　中坪　達哉
トロッコ電車トンネルを出て冬に入る　中尾　三久
紅葉抜け紅葉に入りて山電車　浅野喜代美
鵙鳴きて庭石の亀空仰ぐ　吉本　敏子
秋ふかし玻璃戸はねじを回す鍵　下野　榮子
トロッコと手を振り合うて秋惜しむ　新村美那子
触れてみる出湯の噴水冬隣り　北尾　久子
亀石も歩みそうなる秋日和　林　紀男

講演要旨

海を越えるキリギリス
―ギリシアから日本へ―

富山大学人文学部教授　中島淑恵

私は俳句は不調法でございますが、せっかく俳句大会にお招きいただきましたので、今回は何か俳句と関係のあるお話をさせていただきたいと思います。また、私の勤務校である富山大学附属図書館には、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の旧蔵書（ヘルン文庫）がございます。そこで今回はぜひ、ハーンと俳句の関係をキリギリスに事寄せてお話させていただきたいと思います。

西洋のキリギリスといってすぐに思い浮かぶのは「アリとキリギリス」のお話なのではないでしょうか。日本にはキリギリスとして伝えられているお話ですが、実は古代ギリシアのイソップの物語では、「アリとセミ」ということになっております。ところで、セミにしてもキリギリスにしても、大脳生理学的には、日本人は「虫の声」を聴くと音楽を聴くのと同じように感じ、好ましいものと捉えるのに対して、西洋人はそれを雑音ととらえ、むしろ忌まわしいもの、不快なものとして捉える傾向にあるようです。

ハーンは、アイルランド人の父とギリシア人の母のもとに生まれましたが、彼の感性は西洋と東洋のどちらのものだったのでしょうか。また、一九世紀末の西洋では、『古今集』などの「和歌」が日本の「詩」としていち早く紹介されていったのに対して、「俳句」が独立したジャンルとして認識されるようになるのは、二〇世紀初頭、実際に来日した人々を俟たなければなりませんでした。その中の一人であったハーンは、俳句の革新性にいち早く気づいた西洋人だったのです。

ハーンが日本について初めてコラムを書いたのは、一八八三年五月二七日付『タイムズ・デモクラット』紙に掲載された「日本の詩瞥見」でした。このコラムの中でハーンは、一〇篇の日本の「詩」を紹介しています。『万葉集』に収められた持統天皇の「やすみししわがおほきみのゆふされば…」から、松本弘安の「写真術は造物者の画にして光輝は其筆なり」に至るこれらの「詩」は、実はフランスの日本学者レオン・ド・ロニーの『詩歌撰葉』から引用されたものであることが明らかになっています。このコラムで引用された「詩」の中に俳句はないのですが、来日するより七年も前に、ハーンはすでに日本の「詩」に関心を持っていたことがわかります。

そして、来日後の一八八九年に発表された『霊の国日本にて』には、俳句について説明されている「小さな詩」というコラムが収められています。ここで初めてハーンは、日本の俳句（ハーンはまだ発句と呼んでいました）を二五句引用して紹介しています。これらの俳句は、松江以来の門弟であり自身も俳人であった大谷正信（繞石）によって収集されたものですが、それにしてもこのコラムで引用されている句の中には、「身にしみる風や障子に指のあと」のように、子どもや妻の「死」をテーマにしたものが多いのはなぜなのでしょうか。

ここでもう一つ、ハーンが大きな影響を受けたと思われる蔵書をご紹介します。『ギリシア詞華集』です。これは、紀元前七世紀から紀元一〇世紀に至るおよそ一八〇〇年間にギリシア語で書かれた短い詩がおよそ四五〇〇篇収められた詞華集であり、ヨーロッパでは広く親しまれてきた書物です。ハーンの蔵書にも英語版とフランス語版があり、中にたくさんの鉛筆による書き込みがあることから、彼の着想の源となった書物の一つであろうと考えられます。この『詞華集』の中には、「墓碑銘」と呼ばれるジャンルがあり、本来は本当に故人の死を悼んで、出自や功績、死の顛末などを墓石に彫ったものから、やがてはそのようなジャンルとして確立されて行ったものと思われます。ギリシアは日本と同じ島国であり、

航海中に命を落とした人も多かったことでしょう。また、乳児死亡率や産褥で命を落とした女性も多かったことと思われます。いずれにしても「墓碑銘」が短詩のジャンルとして確立されていた古代ギリシアの詩と、世界最短といっても過言でない俳句は、ハーンの中で形式と内容の両面から結びついたのではないでしょうか。

そして、『ギリシア詞華集』の「墓碑銘」には、人間の死を嘆いたものばかりでなく、実は馬や猫などの愛玩動物の死を嘆いたものもあり、さらに言えば、キリギリスやセミの死を嘆くものまであるのです。そしてハーンはこれらの詩の多くに書き込みを残しています。東京帝国大学での講義の中でも、ハーンはギリシアの昆虫についての詩を紹介しています。また『異国情緒と回顧』に収められた「虫の音楽師」の中で秋の虫について詳しく紹介し、『骨董』には「草ひばり」という随筆が収められていることからも、ハーンがこれらの昆虫に深い関心を抱いていたことは明らかです。そして、これらの虫を愛ずる文化が、単なる日本固有のものではなく、むしろ自身の出自のギリシアにもその源流があるという事実に、ハーンは気づいていたのだと思います。私が今日の講演を「海を越えるキリギリス」と題したのはそのためで、ハーンの頭の中で、日本のキリギリスとギリシアのキリギリスとが、いわば化学反応を起こしたのではないでしょうか。

富山県現代俳句協会 秋季吟行俳句大会

九月二日（日）高岡市生涯学習センターにて開催。参加者四十五名で二句投句。

天　位

こおろぎの髭つきあたる地獄絵図　宮西　昌子

地　位

大仏の結ぶ手にある小さき秋　久崎富美子

人　位

どすんと秋歩きたかろう「大仏さん」　八尾とおる

俳人協会富山県支部 俳句大会

九月二十三日（日）富山電気ビルにて開催。俳人協会理事「群青」共同代表櫂未知子氏を講師に迎え講演を聞く。演題は「風土に生かされる」会員百十名で三句投句。

講師特選

折詰に小さき醤油や菊日和　野村美智子

秋高し駝鳥飼ひたき日なりけり　野村　邦翠

虫の夜の鍵音小さく帰りけり　二俣れい子

闇に追ふ秋風鈴の音一つ　黒瀬　行雲

稲すずめ沸き立つやうに降るやうに　堀　禮子

☆互選高点句

一　位

虫の夜の鍵音小さく帰りけり　二俣れい子

二　位

秋の陽をくるり丸めて鉋引く　但田　長穂

三　位

蕎麦咲いて村にも現るる水平線　川井　城子

俳人協会主催、第八回全国俳句大会ジュニアの部、小学校部門

学校賞　氷見市立窪小学校

消　息

栫　檀

七月十四日（土）十五周年記念事業として、辻恵美子著「泥の好きなつばめ」出版祝賀会が、岐阜グランドホテルにて開催。

講演、中坪達哉県俳連会長

南砺市交流俳句会

七月十六日（月）南砺市、高瀬神社大国殿にて、開催。参加者二十二名。

城端俳句協会虫干法会俳句会

七月二十二日（日）善徳寺、研修道場にて開催。参加者二十名。

辛夷通巻一一〇〇号記念俳句大会

十月十四日（日）富山電気ビルにて開催。参加者　九十名

平成三十年度

辛　夷　賞　菅野桂子

衆山皆響賞　岡田康裕　小澤美子

奨　励　賞　中島廣志

大会句天位

旅疲れ青田巡れば癒えにけり　藤井　哲尾

第46回　砺波市文化祭俳句大会

十月十三日（土）砺波市文化会館にて開催。

中坪達哉県俳連会長　選

天　位

独り居を励ますごとし大花火　根田　勝子

地　位

野良着みな孫のお古よ秋高し　二俣れい子

吹く風に萩を括りし胸濡れて　野村　邦翠

人　位

一本道被りて脱いで夏帽子　田上眞知子

作いかん稲刈る音の軽ろ過ぎて　藤井　哲尾

後戻り鏡に写す日焼けかな　石附　照子

第37回　芭蕉まつり俳句大会

十月二十七日（土）小矢部市石動公民館にて開催。投句一般四八句。小中学生六五九句。

講師　雉同人　佐瀬元子

演題「俳句の力」

優秀句を表彰。

八尾町民俳句大会

十月二十八日（日）八尾ふらっと館にて開催。参加者十三名。

八尾町文化協会の村山志水が特選五句選ぶ。

「寒潮」俳句大会

十月二十八日（日）CiCとやま市民交流館にて開催。参加四五名

天　位

百歳の百の知恵しる涼しさよ　今村　暢子

氷見市民俳句大会

十一月十八日（日）氷見市中央公民館にて開催。

講師、中坪達哉県俳連会長。

講師特選

友の逝く手鞠のような海の月　櫻打　伸子

野菊晴手作り柵に山羊の声　加藤　英一

針箱と生活を共に木の葉髪　長澤扶美子

言うなれば猪の道休耕田　林　紀男

芋並ぶ免許返して広き車庫　東海　さち

第20回　俳人協会長野県支部 俳句大会及び講演会

十一月二十五日（日）長野市にて開催

講師、俳人協会評議員

「辛夷」主宰　中坪達哉県俳連会長

演題、「立句に学ぶ～前田普羅の句と心」

秋季俳句大会作品抄

◇連盟選者特選句

義信選　幸せはこんな匂ひや草むしる　成瀬　輝代
順子選　今年竹少年剣士の藍袴　畠山　美苗
冬青選　一陣の色なき風や牧の空　浜谷　栄子
英子選　独り居に「只今」ひびく秋思かな　馬瀬　和子
玲子選　忽と秋アインシュタイン舌を出し　五箇　洋子
置箔選　風鈴の音の中なる誕生日　久﨑富美子
こうき選　涼しさや風繰る母の謡本　松田　敦子
康裕選　米騒動在りし地に住み稲を刈る　小野田洋子
久恵選　吾亦紅風にたおやかなる余生　長谷田泰男
城子選　米騒動在りし地に住み稲を刈る　小野田洋子
ゆう子選　空蟬の脚に魂残りたり　池田フサ子
弥生選　ラジオより兜太の戦記原爆忌　林　敦子
富美子選　懐かしき声に日傘をたたみけり　寺島　皎
美智子選　大西日一壺となりし母を抱く　吉本　敏子
洋子選　三階に住み屋上に水を打つ　酒井千枝子
直彦選　老女等も椅子に手踊り風の盆　黒﨑　潔
一子選　連結器がちやり繋がる大暑かな　あらたあきら
重之選　能登遠くヨットは海の一行詩　漁　俊久
吉章選　ちちははのやがて我が墓洗ひをり　平譯　敏子
桂子選　閑かさや高志国原の稲に花　泉　西吾
恵子選　緩みなき母の紙縒や星祭　荒田眞智子
圭二選　八月の雲せめぎ合ふ和といくさ　細野　周八
昭夫選　三年間補欠をほめて夏終る　広川　峯子
眞知子選　痩身の妻拭く湯音秋更くる　澤田　宏
寿山選　花火果つ赤き点滅宇宙船　木下　瞳
長穂選　運動会いつもと違ふ母を見る　野﨑　郁雄
京子選　秋夕焼大海原はときめいて　中嶋　黎子
三久選　蟻の列癌検診の列にいる　吉塚三津枝
廣志選　能登遠くヨットは海の一行詩　漁　俊久
達哉選　幸せはこんな匂ひや草むしる　成瀬　輝代
三津夫選　しばらくは善女で居たき滝不動　寺田　恭子
睦子選　秋蝶や子を乗せポニーひとめぐり　漁　俊久
美知子選　大西日一壺となりし母を抱く　吉本　敏子
多佳子選　とほく来て墓参の雨をいつくしむ　鈴木　芹子
栄子選　眼裏の生家は蚊帳の匂ひかな　濱元　旭子
幸子選　七夕に感謝感謝と書きにけり　川上　祐子
賢選　鬼瓦の目頭うるむ極暑かな　日合　英子
千鶴子選　教室を出ると始まる夏休み　有澤　嘉晃
純子選　幸せはこんな匂ひや草むしる　成瀬　輝代
稔選　終戦日廊下の奥は母の部屋　平野もとみ
とおる選　大噴水乾く大気に立ちむかふ　湯口しずえ
白羊選　行水の母の背小さくなりにけり　渡辺　啓子

◇入賞句

天位⑬　幸せはこんな匂ひや草むしる　成瀬　輝代
地位⑨　枝豆の皿を重しに夫へメモ　島倉　千春
人位⑨　番号で呼ばれ炎暑の血を抜かる　室井千鶴子
4位⑧　緩みなき母の紙縒や星祭　荒田眞智子
5位⑦　懐かしき声に日傘をたたみけり　寺島　皎
〃⑦　能登遠くヨットは海の一行詩　漁　俊久
6位⑥　鬼瓦の目頭うるむ極暑かな　日合　英子
〃⑥　海の日や人を吐き出す無人駅　宇波可津志
〃⑥　夕星や潮の匂ひの髪洗ふ　堀　真智子
〃⑥　画用紙を夏の空より塗ってゆく　近藤　渥子
〃⑥　帰省子を送りてよりの畑仕事　山本　恭子
〃⑥　水仕の手ふいて黙祷原爆忌　稲田　節子
〃⑥　娘には娘の帰る家あり盆の月　野村美智子
7位⑤　口ぐちに暑さ持ち寄り納涼祭　小幡富貴子
〃⑤　手の平の合はぬ合掌生身魂　石川　彰子
〃⑤　帰省子の喉を鳴らして井戸の水　寺田千鶴子
〃⑤　忽と秋アインシュタイン舌を出し　五箇　洋子
〃⑤　風鈴の音の中なる誕生日　久﨑富美子
〃⑤　蟻の列癌検診の列にいる　吉塚三津枝
〃⑤　ラジオより兜太の戦記原爆忌　林　敦子
〃⑤　連結器がちやり繋がる大暑かな　あらたあきら
〃⑤　終戦日独り暮らしの片手鍋　宮西　昌子
〃⑤　潮の香の駅に降り立ち夏惜しむ　新村美那子
8位④　今年竹少年剣士の藍袴　畠山　美苗
〃④　米騒動在りし地に住み稲を刈る　小野田洋子

「越中讃歌」（衣）高点上位入賞作品

路地涼し海女の干し衣に般若経　小坂優美子
夏萩や蔵より出され能衣装　牧長　幸子
甚平の胡坐の中に子の胡坐　平井　弘美
虫干しの袈裟も法衣も吊るされて　室井千鶴子

句集ほか出版紹介

平30・9

VITAクラブ俳句教室会員句集

訃報

県俳句連盟幹事　田村　京子　氏
十月十一日、ご逝去。謹んで哀悼の意を表します。

二〇一九年度　総会・俳句大会（予告）
とき　二〇一九年六月一日（土）
ところ　北日本新聞ホール
講師　「栞俳句会」代表　松岡　隆子　先生
（詳細は追って発表）

二〇一九年度　夏季吟行会（予定）
とき　七月十四日（日）
ところ　富山県民共生センター　サンフォルテ
講師　富山県俳句連盟会長　「辛夷」主宰　中坪　達哉　先生

編集後記

連盟会報87号をここにお届け致します。次回は二〇一九年七月一日発行予定です。会報に関する記事等があれば、**原稿用紙**に記入の上、左記に送付下さい。（郵送又はFAXのみ）

〒九三九―八二一　南砺市理休一二六　川井城子
FAX・TEL（〇七六三）六二―一三〇八